

永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2012年 5月

「キリストの第三の誘惑」「恵みの契約」「短い患難」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「キリストの第三の誘惑」

4

朝のマナ

「恵みの契約」

8

神の驚くべき恵み

現代の真理

「短い患難」

40

最後の出来事

力を得るための食事

「黒豆ごはん」

48

お話コーナー

「ハゲワシの価値はどこにあるか？」

50

教会

【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

電話：0494-22-0465

FAX：0494-26-5059

【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2

電話：088-831-9535

【沖繩集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21

電話：0980-55-8136

アクセス

ホームページ：<http://www.4angels.jp>

メール：support@4angels.jp

発行日 2012年4月30日

編集&発行 SDA改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

イラスト：comstock.com p.1; Gettyimages p.1;

Sermonview p.9

神とあなたの間で解決すべき問題

人の心には、喜びと悲しみがあるかと思えば、横道にそれようとするわがままな心があって、さまざまな不純と虚偽が宿っている。神は、その動機、意図、また目的そのものをごらんになるのである。汚れたそのままの心で神のみもとに行こう。詩人がうたったように、すべてをご覧になる神にすっかり心を開け放して神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください」(詩篇 139:23, 24) と呼ばわろう。(キリストへの道 41, 42)

ダビデ……が祈ったのは、罪のゆるしばかりでなく心がきよめられることであった。また聖潔の喜びを切望し、もう一度神とやわらぎ神との交わりにはいたいと願ったのである。(キリストへの道 25)

罪の自覚は生命の泉を毒してしまった。しかしキリストは、「わたしがあなたの罪をとってあげる。わたしはあなたに平安を与える。わたしの血で、わたしはあなたを買ったのだ。あなたはわたしのものだ。わたしの恵みによって、あなたの弱くなった意志を強め、罪に対する苛責の念を取り去ってあげる」と、おっしゃるのである。試練におそわれたとき、心労と困惑に取りかこまれたとき、失望落胆して今や絶望しようとするとき、イエスをながめなさい。あなたを取りかこんでいた暗黒は、彼のご臨在による明るい輝きによって追い払われる。罪があなたの魂と争って勝とうとし、良心を苦しめるとき、救い主を見あげなさい。彼の恵みの力は罪を征服するのに十分である。不安におののく心を感謝をもって救い主に向けなさい。あなたの前におかれた望みをつかみなさい。キリストはあなたを、ご自分の家族の子供にしようと待っておられる。彼の力はあなたの弱きを助け、彼は一步一步あなたを導いてくださる。あなたの手を彼の手のうちにおいて導いていただきなさい。

キリストは遠くにおられると決して思ってはならない。彼はいつもそば近くにおられる。彼のやさしいご臨在は、あなたを取りかこんでいる。キリストはあなたが彼を見いだすように望んでおられるということ覚えて、彼を求めなさい。(ミストリー・オブ・ヒーリング 57)

世には宗教を頭だけで受け入れ、敬けんの形だけを受け入れて、心のきよめられていない人が多くある。わたしたちは「神よ、わたしのために清い心をつくり、わたしのうちに新しい、正しい霊を与えてください」(詩篇 51:10)と祈ろう。自分の魂の状態を吟味し、身に危険が迫っていると思って、たゆまず、また熱心でなければならぬ。これは神とあなたの魂との間で解決されるべき問題、永遠に決定すべき問題である。(キリストへの道 42)

受肉—キリストの性質

「キリストの第三の誘惑」

わたしたちの救い主は、天父がご自分に与えて下さる耐えるための力を越えるような誘惑に合わせることはなさらず、たまたもしご自分が受けているテストを忍耐強く耐えるならば、勝利者として下さるという天父への完全な信頼を示した。キリストはご自身の意志で、危険のうちに身をおいたのではなかった。神は、しばらくの間、サタンがご自分の御子に対してこの力を行使することを許された。イエスはもしご自分がこの極度に厳しい立場において、ご自分の高潔を守るならば、他にどうすることもできなくなったときに、ご自分を救出なさるために神の御使が遣わされることをご存じであった。このお方は人性を取っておられ、人類の代表であられた。

サタンは、自分の第二の大きな誘惑において、何一つキリストに勝てなかったことを知った。「それから、悪魔はイエスを高い所へ連れて行き、またたく間に世界のすべての国々を見せて言った、『これらの国々の権威と栄華とをみんな、あなたにあげましょう。それらはわたしに任せられていて、だれでも好きな人にあげてよいのですから。それで、もしあなたがわたしの前にひざまずくなら、これを全部あなたのものにしてあげましょう。』」（ルカ 4:5～7）。

初めの二つの誘惑において、サタンは自分の真の目的あるいは自分の品性を表していなかった。彼は天の宮廷からの高められた使者であると主張したが、今や彼は自分の仮面を脱ぎ捨てた。彼はキリストの前にパノラマのような光景のうちに、世界の諸国を最も魅力的な光の中で示し、自分は世の君だと主張した。

最も魅惑的な誘惑

この最後の誘惑が、三つの中で最も魅惑的であった。サタンはキリストの生涯が悲しみと困難と闘いの生涯になるはずのことを知っていた。そして、彼はこの事実を、キリストを買収してその高潔さを放棄させるために利用できると思った。サタンはこの最後の誘惑にありつただけの力をかけた。なぜなら、この最後の努力こそ、だれが勝利者となるか自分の運命を決定することになるからであった。彼

は世界が自分の領土であり、自分が空中の権をとる君だと主張した。彼はイエスを非常に高い山の頂へ連れて行き、そこでパノラマのような光景のうちに長い間自分の支配下にあった世のあらゆる王国をこのお方の前に提示し、まとめて一つの贈り物としてそれらをイエスに提供した。彼は世の王国を、イエスの側で何の危険も犯さずに所有することができると言った。サタンは、自分の王権と支配権を明け渡すと約束した。そうすれば、キリストが一つの好意を表すだけで、正当な支配者になる。その日み前に提示した世の王国をキリストに渡す見返りとして、彼はただキリストが彼を至高者として敬意を表することを要求する。

イエスの御目は一瞬、ご自分の前に提示された栄光に留まった。しかし、このお方は向きを変えて、魅惑的な光景を見ることを拒まれた。このお方は誘惑者と無駄に関わることによってご自分のゆるがない高潔さを危険にさらすことをされないのであった。サタンが敬意を求めたとき、キリストの神聖な義憤が引き起こされ、もはやサタンの冒瀆的な傲慢さを許容することも、ご自分の前にとどまることを許すことさえもおできにならなかった。ここで、キリストはご自分の神聖な権威を働かせ、サタンに止めるように命じられた。「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」(マタイ 4:10)。サタンは自分の誇りと尊大さのうちに、自らが世の正当にして最高の支配者であり、そのあらゆる富と栄光の所有者であると宣言し、あたかも自分が世界とそこにある万物を創造したかのように、そこに住むすべての者の敬意を自分のものとして主張していた。彼はキリストに言った、「これらの国々の権威と栄華とをみんな、あなたにあげましょう。それらはわたしに任せられていて、だれでも好きな人にあげてよいのですから」(ルカ 4:6)。彼はキリストが自分を礼拝すれば、自分の権利をすべてただちに引き渡すという特別な契約をキリストと結ぼうと努力した。

創造主に対するこの侮辱は、神の御子の義憤を引き起こし、彼を譴責し、追放させた。サタンは、第一の誘惑において、非常にうまく自分の真の品性と目的を隠したので、自分のことをキリストが打ち勝ち、天から追放した墮落した叛逆の長だとは気づくまいとうぬべれた。キリストからの退却命令である「サタンよ、退け」という言葉は、彼がはじめて知られていたこと、また彼のすべての欺瞞的な能力は、神の御子に対して成功しなかった証拠である。サタンはもしイエスが人類を贖うために死なれるとしたら、しばらく後には、自分の力が終わり、減ぼされることを知っていた。そのために、可能であれば、神の御子によって始められた偉大な働きを完成を阻止するのが、彼の考え抜いた計画であった。もし

人間の贖いの計画が失敗すれば、彼はそのときにわがものと主張していた王国を持ち続けるのであった。そして、もし彼が成功すれば、彼は天の神に反対して、統治するものとうぬばれた。

イエスが天を去られ、そこにご自分の権力と栄光を残してこれたとき、サタンは大喜びした。彼は神の御子が自分の力の範疇におかれたと思った。誘惑はエデンにおいて非常にたやすく聖なる夫婦をとらえたので、彼は自分の悪魔的な悪賢さと力をもって、神の御子でさえ打ち倒せるだろうと、またそれによって自分の命と王国を守ることができるだろうと願った。もし彼が自分の誘惑をもってアダムとエバにしたように、このお方を御父のみ旨からはずれるよう誘惑することができれば、そのとき彼の目的は果たせるのであった。

イエスがご自身の命を捧げることによってサタンの所有を贖い、そしてしばらく後に、天地にある万物がご自分に服するべき時が来るのであった。イエスは堅固であられた。このお方は苦しみ、不名誉な死、そして御父の定められた方法によって地の諸国の合法的な統治者となられること、また彼らを永遠の所有としてご自分のみ手のうちに得ることを選ばれた。サタンもまたこのお方のみ手のうちに渡されて、死によって滅ぼされ、二度とイエスや栄光のうちにある聖徒たちを悩まさないのであった。

断固として抵抗された誘惑

イエスは狡猾な敵に次のように言われた、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」(マタイ 4:10)。サタンは、キリストにご自分が神のみ子である証拠を示すよう求めた。そして、この事例において、彼の求めた証拠を得た。キリストの神聖なご命令に、彼は従わざるを得なかった。彼は撃退され、沈黙させられた。彼には有無を言わせぬ退去命令に耐える力がなかった。彼は一言も返せず、即座に止めて、世の贖い主を後に残した。

サタンのおぞましい存在は引き下がった。戦いは終了した。激しい苦しみを伴う、荒野におけるキリストの勝利は、アダムの失敗と同様に完璧であった。そして、しばらくの間、このお方はご自分の力強い敵の存在と、その使の軍から解放された。

サタンが自分の誘惑を止めたとき、短い間、イエスから離れた。敵は打ち負かされたが、戦いは長くはなはだ厳しかった。そのため、終わったとき、イエスは疲労困憊(こんぱい)して気絶してしまわれた。このお方は死んでしまったか

のように地面に倒れられた。王宮でこのお方の御前に頭を垂れていた天使たち、そして非常な、しかし心痛を伴う関心をもって愛する司令官を見、驚きをもってこのお方が耐えられたサタンとの恐るべき戦いを目撃していた天使たちは、今やこのお方の許へ来て、仕えた。彼らはこのお方に食べ物を備え、力づけた。なぜなら、このお方は死んだ人のように横たわっておられたからである。御使たちは、世の贖い主が、人類の贖いを成し遂げるために、言い表せない苦しみを経験しておられるのを知って、驚きと畏敬に満たされた。王宮で神と等しくあられたお方が彼らの前に六週間近い断食のためにやせ衰えておられた。孤独にたった一人でこのお方は、天から追放された反逆の長に追跡された。このお方はかつて人が耐えるようにもたらされたどのテストよりも厳しく激しいテストに耐えられた。闇の権力との戦いは、弱り苦しんでいた状態のキリストの人性にとってあまりに長く、非常に厳しいものであった。御使たちは御父から御子への愛と慰めのメッセージと、また人類のためにキリストが得られた十分に完全な勝利のうちに全天が勝利を歓喜したとの保証を携えてきた。

人類の贖いのための代価は、贖われた者たちが贖い主と共に、神のみ座のわきに立つときまで、決して十分に悟ることができない。そして彼らが不死の命と永遠の報いの価値を正しく評価する能力を得るとき、勝利と不死の凱旋の歌声が盛りあがるのである。「大声で叫んでいた、『ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい。』」（黙示録 5:12）。「またわたしは、天と地、地の下と海の中にあるすべての造られたもの、そして、それらの中にあるすべてのもの言う声を聞いた、『御座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように。』。」とヨハネは言った（黙示録 5:13）。

サタンは、自分の最も強力な努力と最も力ある誘惑において失敗したにもかかわらず、なお将来いつか自分の努力がもっと成功するという希望をまったく放棄したのではなかった。彼は自分の力と策略をこのお方に対して試す機会の時となるキリストの公生涯の期間を心待ちにした。サタンは神の選民であるユダヤ人の理解力を盲目にし、彼らがキリストを世の贖い主として見分けることがないようにしようと計画した。彼は彼らがこのお方を受け入れず、このお方の地上の生涯をできるだけ苦々しいものとするために、彼らの心を神の御子に対するねたみと嫉妬と憎しみで満たすことができると考えた。

神の驚くべき恵み

God's Amazing Grace



5月 「恵みの契約」

創造の前に

「神はわたしたちを救い、聖なる招きをもって召して下さったのであるが、それは、わたしたちのわざによるのではなく、神ご自身の計画に基き、また、永遠の昔にキリスト・イエスにあってわたしたちに賜わっていた恵み」(テモテ第二 1:9)

恵みの目的と計画は永遠の昔から存在した。地の基が据えられる前から、人が創造され、神のご意志を行うための力を授けられるべきことは、確固とした神の会議によるものであった。しかし、人の背信は、そのすべての結果と共に、全能のお方に隠されてはいなかった。それにもかかわらず、このお方がその永遠の目的を実行に移すことを思いとどまることはなかった。なぜなら、主は義のうちにご自分のみ座を確立なさるからであった。神は初めから終わりを知っておられる。……それゆえ贖いは後から思いついたものではない。……そうではなく、世界のこの小さな原子の祝福のためばかりでなく、神が創造されたすべての諸世界の益のために成し遂げられるべき永遠の目的であった。

諸世界の創造、福音の奥義は、すべての創造された知的存在者に、自然およびキリストを通して神のご品性の栄光を明らかにするという一つの目的のためである。「御子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得るために、そのひとり子を」と与えることによるご自分の驚くべき愛をはっきりと示すことにより、神の栄光が失われた人類と他世界の知的存在者にあらわされる。(サイン・オブ・タイムズ 1892年4月25日)

イエスをご自分の人性の腕に人類を抱き、その神性の腕で無限をつかんでおられる。このお方は聖なる神と罪深い人間の間の仲裁者「われわれふたりの上に手を置く」ことのできるお方である(ヨブ 9:33)。

贖罪の大いなる契約における神と人との間のこの一つであるという条件は、永遠の昔からキリストと取り決められていた。恵みの契約は父祖たちにあらわされた。アブラハムとなされた契約は……キリストのうちにある神によって批准された契約であり、わたしたちに説かれているのとまったく同じ福音であった。……パウロは福音、イエス・キリストの説教を「長き世々にわたって、隠されていたが、今やあらわされ、預言の書とおして、永遠の神の命令に従い、信仰の従順に至らせるために、もろもろの国人に告げ知らされた奥義の啓示」と話している(ローマ 16:25, 26)。(同上 1891年8月24日)

永遠に続く

「耳を傾け、わたしにきて聞け。そうすれば、あなたがたは生きることができる。わたしは、あなたがたと、とこしえの契約を立てて、ダビデに約束した変わらない確かな恵み(憐れみ)を与える。」(イザヤ 55:3)

人類の救いは絶えず天の会議の目的であった。恵みの契約は世の礎が据えられる前から結ばれていた。それは永遠の昔から存在し、永遠の契約と呼ばれていた。神が存在されなかったことがないように、このお方の恵みを人類に明らかにすることが、永遠なるみ思いの喜びでないことは一度もなかった。(SDA バイブル コメント [E.G. 初巻・コメント] 7巻 934)

大争闘の初めから、神のご品性を誤解させ、その律法に反逆させることがサタン intent したところであった。……しかし、悪の働きのただ中であって、神のみ旨は着実に完成をめざして前進する。神は、すべての造られた者に、ご自分の公義と慈愛を明らかにしておられる。サタンの誘惑によって全人類は神の律法を犯す者となった。だがみ子の犠牲によって彼らが神に立ち帰る道が開かれた。キリストの恩恵を通して彼らは天父の律法に従うことができるようにされる。このように、いつの時代にも神は背信と反逆のただ中から、ご自分に忠実な一つの民—「心のうちにわが律法をたもつ」民(イザヤ書 51:7)—をお集めになる。(人類のあけぼの上巻 398, 399)

神の働きは、その発展の段階に相違があり、そして、ちがった時代の人々の要求に応じるために、その力のあらわれ方に相違があったけれども、すべての時代において同じであった。最初の福音の約束から始まって、家長時代とユダヤ時代を通じ、そして、現代に至るまで、贖罪の計画にある神のみこころは、徐々に展開されて与えられたのである。……シナイから律法を宣言されたかた、そして、モーセに礼典律の戒めをお与えになったかたは、山の上で説教をされたおかたと同じである……両時代を通じて、教師は同じである。神の要求される場所は同じである。神の統治の原則は同じである。(人類のあけぼの上巻 443, 444)

この地上における神の最後の働きにおいて、神の律法の標準はふたたび高められる。……神はご自分の契約をお破りにならず、またみ口から出たことをお変えにならない。神の言葉は、神のみ座のように変わることなく、永遠に固く立つのである。(国と指導者上巻 155)

エデンにおいて

「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」。 (創世記 3:15)

恵みの契約は、まず、エデンで人間に与えられたのである。人間が墮落したあとで、女のすえがへびのかしらを砕くという約束が与えられた。この契約は、すべての人に罪のゆるしを与え、キリストを信じる信仰によって、その後従うことができるように、神の恵みの助けを与えた。それは、また、神の律法に忠誠を尽くすことを条件にして、永遠の命を約束した。こうして、家長たちは、救いの希望を与えられたのである。(人類のあけぼの上巻 439)

アダムとエバは創造されたとき神の律法の知識を持っていた。それは心に記されており、彼らはその主張を理解していた。(SDA バイブル・コメント [E.G. 初巻・コメント] 1 巻 1104)

神の律法は人が創造される前に存在していた。それは聖なる存在者の状態に合わせており、天使たちすらそれに統治されていた。墮落の後も義の原則は変わらなかった。律法から取り去られるものはなかった。その聖なる教訓は一つとして改良できないのであった。そしてそれは初めから存在していたように、絶えることなく代々にわたり永遠を通じて存在し続ける。(エレケッド・メッセジ 1 巻 220)

アダムの違反の後、律法の原則は、……墮落した状態の人間に应じて、明確に整えられ、表現された。御父との会議で、キリストは犠牲制度を制定された。それは、死がただちに違反者に臨む代わりに、神の御子という偉大で完全な捧げ物を予表するいけにえに移されるというものであった。……このいけにえの血によって、人は、世の罪の償いをするキリストの血を信仰によって待望したのであった。(同上 230)

地上におけるキリストの使命は、律法を廃することではなく、その恵みによって人類を再びその律法に従わせることであった。……キリストは、自ら律法に従うことによって、律法の不変性をあかしし、キリストの恵みによって、アダムのむすこ、娘はみな完全にそれに従うことができることを証明された。(祝福の山 60～62)

ノアにあずかる

「神はノア……に言われた、『わたしはあなたがた及びあなたがたの後の子孫と契約を立てる。』」（創世記 9:8, 9）

邪悪が非常に広く行き渡っていたので、神は、「『わたしが創造した人を地のおもてからぬぐい去ろう』と言われた。……しかし、ノアは主の前に恵みを得た。……ノアはその時代の人々の中で正しく、かつ全き人であった。ノアは神とともに歩んだ」（創世記 6:7～9）。（ヘクトッド・メッセジ 1巻 90）

ノアは人々に説教し、彼自身と家族の救いのために、神が命じられたように箱舟をも準備すべきであった。彼は説教するだけでなく、箱舟を建造する彼の模範が、自分の説教していることを彼が信じていることをすべての者に確信させるのであった。（霊的賜物 3巻 65）

ノアは、自分たちを非常に慈悲深く保護された神のことを忘れず、〔箱舟から出てくると〕すぐに祭壇を築き、……大いなる犠牲であるキリストを信じる信仰を示し、自分たちの驚くべき保護のゆえに神への感謝を表して、祭壇の上に燔祭を捧げた。ノアの捧げ物はかぐわしい香りのように、神のみ前に上った。このお方はその捧げ物を受け入れ、ノアとその家族を祝福された。……

そして集まる雲と降る雨で人が恐怖に満たされないように、……神は約束でノアの家族を慈悲深く励まされた。「わたしがあなたがたと立てるこの契約により、すべて肉なる者は、もはや洪水によって滅ぼされることはなく、また地を滅ぼす洪水は、再び起らないであろう」。さらに神は言われた、「これはわたしと、あなたがた及びあなたがたと共にいるすべての生き物との間に代々かぎりなく、わたしが立てる契約のしるしである。すなわち、わたしは雲の中に、にじを置く。これがわたしと地との間の契約のしるしとなる。わたしが雲を地の上に起すとき、にじは雲の中に現れる。こうして、わたしは、わたしとあなたがた、及びすべて肉なるあらゆる生き物との間に立てた契約を思いおこすゆえ、水はふたたび、すべて肉なる者を滅ぼす洪水とはならない。にじが雲の中に現れるとき、わたしはこれを見て、神が地上にあるすべて肉なるあらゆる生き物との間に立てた永遠の契約を思いおこすであろう」（創世記 9:11～16）。（同上 73, 74）

洪水に関してノアにお与えになった保証に、神ご自身は、神の恵みの最も尊い約束の一つを結びつけられた。「『わたしはノアの洪水を、再び地にあふれさせないと誓ったが、そのように、わたしは再びあなたを怒らない、再びあなたを責めない』と誓った。山は移り、丘は動いても、わがいつしみはあなたから移ることなく、平安を与えるわが契約は動くことがないとあなたをあわれまれる主は言われる」（イザヤ書 54:9, 10）。（人類のあけぼの上巻 108）

アブラハムに新たにされた

「わたしはあなた及び後の代々の子孫と契約を立てて、永遠の契約とし、あなたと後の子孫との神となるであろう。」(創世記 17:7)

洪水の後、人々はもう一度地上で増えていき、不道徳もまた増加した。……主はついに、頑なになった違反者が自分たちの悪い道に従うがままにされ、その一方、セムの家系のアブラハムを選び、彼を子孫のための律法の保管者とされた。(預言の霊 3 卷 15)

この同じ契約は、アブラハムにくり返されて、「地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう」という約束が与えられた(創世記 22:18)。この約束はキリストを指し示したものであった。アブラハムは、このことを理解し、キリストにたよって罪のゆるしを求めた。彼が義と認められたのはこの信仰であった。アブラハムとの契約は、神の律法の権威をも維持した。主は、アブラハムに現われて、「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ」と言われた(創世記 17:1)。この忠実なしもべについて、神は、「アブラハムがわたしの言葉にしたがってわたしのさとしと、いましめと、さだめと、おきてとを守った」とあかしされた(創世記 26:5)。……

この契約はアダムと取りかわされ、また、アブラハムにくり返して与えられたとはいえキリストの死によって初めて批准されたのである。これは、初めて贖罪の知らせがかすかながら与えられたときから、神の約束によって存在していたのである。人々は、これを信仰によって受け入れていた。しかし、それがキリストによって批准されたときに、それは新しい契約と呼ばれた。神の律法がこの契約の基礎であった。律法は、単に、神のみこころに人々をもう一度調和させ、彼らが神の律法に従うことができるようにする手段であったに過ぎない。(人類のあけぼの上巻 440)

もしアブラハムの契約の下で神の戒めを守ることが人類にとって可能でないなら、わたしたちのうち、すべての魂が残らず失われることになる。アブラハムの契約は恵みの契約である。「あなたがたの救われたのは、実に、恵みに……よるのである」(エペソ 2:8)。不従順な子としてであろうか。否、その戒めすべてに従順な者としてである。(SDA バイブル・コメンタリ [E.G. ホイト・コメント] 1 卷 1092)

アブラハムの質問をしない従順は、聖なる記録の中で見いだされる信仰と神への信頼の最も顕著な例の一つであった。……アブラハムが持ったのとちょうど同じ信仰と信頼が、今日の神の使命者たちに必要である。(教会への証 4 卷 524)

契約の条件

「それで、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたがたはすべての民にまさって、わたしの宝となるであろう。全地はわたしの所有だからである。」(出エジプト 19:5)

はじめに神は、人類が幸福と永遠の生命を得る方法として、神の律法を彼らにお与えになった。(国と指導者上巻 147)

十誡の「せよ」と「してはならない」は、もしわたしたちが宇宙を統治している律法に服従するなら、わたしたちに保証された十の約束である。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである」(ヨハネ 14:15)。ここに神の律法の全容と内容がある。ここに一人びとりのアダムのみすこ娘のための救いの条件の要点が述べられている。……

人に提供することのできる最大の愛の十の規則からなる律法は、「これをせよ、そうすればあなたはサタン統治と支配下に陥ることはない」との約束のうちに、魂に語りかけている天からの神のみ声である。その律法の中には、そのように見えたとしても、否定的なものはない。それは「行って生きよ」である。(SDA パイブル・コメント [E.G. 初巻・コマ] 1 巻 1105)

とこしえの命を受ける条件は、わたしたちの祖先が罪に陥る前すなわちパラダイスにいたときと全く同じであって、それは、神のおきてに完全に服従すること、つまり完全に義であることである。もしとこしえの命がこの条件以下で与えられるものであるとすれば、全宇宙の幸福は危険にさらされ、罪の道が開けてあらゆる災と悲惨とが永久に絶えないことであろう。(キリストへの道 81)

キリストは、戒めが要求することを、少しもゆるやかにはなさない。絶対にまちがう余地のないはっきりしたことばで、永遠の命に入るには、戒めに従わなければならないことをお示しになった。これは、墮落前のアダムに要求されたのと同じ条件である。……恵みの契約の下で要求されることは、エデンで要求されたものと同様に広いもので、清く、正しく、善である神の戒めとの調和である。(キリストの実物教訓 370)

旧約聖書に示されている品性の標準は、新約聖書に示されているのと同じである。この標準はわたしたちの到達できないものではない。神のお与えになる命令やさしずにはみな約束、しかも非常に積極的な約束が含まれていて、それがその命令の基礎となっている。神はわたしたちが神に似た者となることができるように備えをしてくださっている。そして神は、人が曲がった意志をさしはさんで神の恵みをむなしくしない限り、これをなしとげてくださる。(祝福の山 94)

人間の約束

「民はみな共に答えて言った、『われわれは主が言われたことを、みな行います。』
モーセは民の言葉を主に告げた。」(出エジプト 19:8)

もう一つの契約は、聖書で「古い」契約と呼ばれているが、それは、シナイで神とイスラエルの間に結ばれたもので、それは、そのとき犠牲の血によって批准された。アブラハムに与えられた契約は、キリストの血によって批准され、「第二の」または、「新しい」契約と呼ばれている。それは、この契約に印を押す血が、第一の契約の後に流されたからである。(人類のあけぼの上巻 440)

シナイに宿営するとまもなく、モーセは神に会うために山へ召された。……イスラエルは、いま神との親密な、特殊な関係に入れられるのであった。すなわち、彼らは、神の統治下にある一つの教会、一つの国民として統合されるのであった。民のために、モーセに次のような言葉が与えられた。……もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、あなたがたはすべての民にまさって、わたしの宝となるであろう。全地はわたしの所有だからである。あなたがたはわたしに対して祭司の国となり、また聖なる民となるであろう」(出エジプト記 19:4～6)。

モーセは宿営にもどって、イスラエルの長老たちを呼び集め、神の言葉を彼らにくりかえした。彼らは、「われわれは主が言われたことを、みな行います」と答えた(出エジプト記 19:8)。こうして彼らは、神と厳粛な契約を結び、神を彼らの統治者として受け入れることを誓い、これによって、彼らは特別な意味で、神の権威の下にある民となった。(同上 352, 353)

人々は、その奴隷時代に、神に関する知識と、アブラハムに与えられた契約の原則の大部分を忘れてしまっていた。……彼らは、偶像礼拝と腐敗のなかで生活していたので、神の神聖さと、自分たちの心のはなはだしい罪深さと、自分たちの力だけでは、神の律法を守ることができないこと、そして、彼らには、救い主が必要であることを真に自覚していなかった。……神は、彼らをシナイに導き、ご自分の栄光をあらわされた。神は、彼らに律法を与え、服従することを条件にして、大きな祝福をお約束になった。……人々は、自分たちの心の罪深さと、キリストの助けがなくては神の律法を守ることができないことを自覚しなかった。……彼らは、自分たちの義を確立することができると感じて、「わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行います」と宣言した(出エジプト記 24:7)。(同上 441, 442)

まさった約束

「ところがキリストは、……さらにまさった約束に基いて立てられた、さらにまさった契約の仲保者となられたことによる。」(ヘブル 8:6)

イスラエルの人々は、神の戒めを見失わないように特に命じられていた。戒めに従うときに、彼らは、力と祝福を受けるのであった。(国と指導者上巻 261)

彼らは、恐るべき威光のうちに律法が宣言されるのを見、山の前で恐れおののいた。しかし、それにもかかわらず、その後わずか数週間しかたたないうちに、彼らは神との契約を破り、偶像にひざまずいて礼拝したのである。彼らは、契約を破ってしまったために、神の恵みを受けることは望めなくなった。そして、今、自分たちの罪深さと、ゆるしの必要を認めた彼らは、アブラハムの契約にあらわされ、そして、犠牲のささげものによって示された救い主の必要を感じるようになった。彼らは今、信仰と愛によって、罪の奴隷からの救い主としての神に結びつけられた。こうしてこそ、彼らは新しい契約の祝福を感謝する用意ができたのである。

「古い契約」の条件は、従って生きよということであった。「人がこれを行うことによって生きるものである」しかし、「この律法の言葉を守り行わない者はのろわれる」(エゼキエル書 20:11、レビ記 18:5 参照、申命記 27:26)。「新しい契約」は、「さらにまさった約束」によるもので、罪のゆるしの約束と、心を新たにする神の恵みと、神の律法の原則に心を一致させる約束によるのである。(人類のあけぼの上巻 442)

新しい契約の祝福は、純粹に不義と罪の許しにおける恵みに基礎を置いている。……罪を告白し、心をへりくだらせるすべての者は憐れみ、恵み、保証を見出す。神は罪人に憐れみを示すことで、義であることをお止めになるのであろうか。このお方はご自分の聖なる律法を辱め、それ以後その違反を見過ごすのであろうか。神は真実であられる。変わらないお方である。救いの条件はいつも同じである。命、永遠の命は神の律法に従うすべての者のためである。……

新しい契約のもとで、永遠の命が得られる条件は古い契約—完全な従順—と同じである。……新しいより良い契約の中で、キリストは、律法の違反者が信仰によってご自分を個人的救い主として受け入れるなら、彼らのために律法を成就された。……より良い契約で、わたしたちはキリストの血によって罪から清められる。(SDA バイブル・コメント [E.G. 初作・コメント] 7 巻 931)

心にしるされた

「しかし、それらの日の後に……わたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にしるす。……わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない」。(エレミヤ 31:33, 34)

石の板に刻まれたのと同じ律法が、聖霊によって心の板に書かれるのである。自分自身の義を確立させようと努力するかわりに、われわれは、キリストの義を受け入れる。キリストの血がわれわれの罪を贖うのである。キリストの服従が、われわれに代わって受け入れられる。こうして、聖霊によって新しくされた心は、「御霊の実」を結ぶのである。キリストの恵みによって、われわれは心に書かれた神の律法に従って生きるのである。キリストのみ霊を持っているから、彼が歩かれたように歩くのである。(人類のあけぼの上巻 442, 443)

ここに、神の子ら一とくに神の恵みに頼り始めた者が誤りがちなことが二つある。これは特別に注意しなければならない事である。まず第一に……自分の行為をながめ、自分の力を頼みとして神と調和しようとする事である。自分の行為によっておきてを守り、きよくなろうとしている人は、不可能なことをしようとしているのである。……

それとは反対であるが、同じように危険なことは、キリストを信じれば人は神のおきてを守らなくてもよいという考えである。つまり、ただ信仰によってキリストの恵みにあずかるようになったのであるから、行いはわたしたちの救いと全然関係がないということである。……おきてが心にしるされるとき、それはその人の生活を左右するのではないであろうか。……人は服従しなくてもよいというのではない。信仰—ただ信仰のみがわたしたちをキリストの恵みにあずからせ、服従することができるようにするのである。……

神のみ言葉を信ずるというばかりでなく、神に意志を服従させ、心をささげ愛情を注いでこそ、信仰があるといえるのであって、そうした信仰は、愛によって働き、魂をきよめるのである。この信仰によって、心は神のみかたちに造りかえられる。新たにされない心は、神のおきてに従いもしなければ、実際、従うこともできないのであるが、信仰によって新たにされた今は、きよいいましめを喜び、詩篇記者とともに「いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。わたしはひねもすこれを深く思います」(詩篇 119:97)とすることができる。そしておきての義が「肉によらず霊によって歩く」(ローマ 8:4)わたしたちのうちに全うされるのである。(キリストへの道 77～84)

悔い改めの賜物

「そして、イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、このイエスを導き手とし救主として、ご自身の右に上げられたのである」(使徒行伝 5:31)

救う恵みの初めの実の一つは悔い改めである。わたしたちの偉大な教師は、罪を犯している堕落した人間への教訓の中で、ご自分の恵みによって、男女が聖潔と純潔の新しい命を生きることができることを宣言しつつ、この恵みの命を与える力を差し出される。この命を生きる者は天の王国の原則を実行する。彼は神に教えられて、他の人々を狭い道へと導く。彼は足のなえた者を不確かな道へ導き入れない。彼の生活における聖霊の働きは、彼が神性にあずかる者であることを示す。このようにキリストの御霊によって働いていただく魂はだれでも、豊かな恵みをあふれるばかりに受けるので、彼の良い働きを眺めて、不信仰な世界は彼が神の力によって支配され、維持されて、神に栄光を帰すよう導かれていることを認める。……

エゼキエルの 34 章を読み、研究しなさい。わたしたちはその中に最も尊い励ましを与えられている。「わたしはわが群れを助けて、再びかすめさせず、」そしてわたしは彼らと平和の契約を結び、……」と主は宣言される。

平和の契約のもっとも顕著な特徴は、罪人が悔い改めて自分の罪から離れるときに、彼に表される許しの恵みのただならぬ豊かさである。聖霊は福音をわたしたちの神の優しい憐れみによる救いとして述べる。「わたしは、彼らの不義をあわれみ、もはや、彼らの罪(と彼らの不法)を思い出すことはしない」と主は悔い改める者に宣言される(ヘブル 8:12)。神は罪人に憐れみを示すことによって義に背を向けられるのであろうか。否、神は罰することなくご自分の律法が犯されるがまま許すことにより、それを辱めることはおできにならない。新しい契約の下で、完全な従順こそ命の条件である。もし罪人が悔い改め、自分の罪を告白するなら、彼は許しを見出す。彼のためのキリストの犠牲によって、許しが彼のために確保される。キリストは、すべての悔い改めた信じる罪人のために律法の要求を満足させてくださる。……

キリストによってわたしたちのためになされた贖罪は、御父にとって全く、非常に満足されるものである。神は正義であることができ、しかも信じる者を義認することがおできになる。(原稿 28、1905 年)

許しの賜物

「あなたは罪をゆるす神、恵みあり、あわれみあり、怒ることおそく、いつくしみ豊かにましまして、彼らを捨てられませんでした。」(ネヘミヤ 9:17)

正義は、罪が許されるだけでなく、死刑が実行されることを要求する。神は、ご自分のひとり子の賜物のうちに、この両方の要求を満たされた。人間の代わりに死なれることによって、キリストは刑罰をあますことなく受け、許しを提供された。(レクテッド・メッセージ 1巻 340)

神はわたしたちが自分の罪を告白し、ご自分のみ前にわたしたちの心をへりくだらせることを要求なさる。しかし、それと同時にわたしたちをご自分の信頼をおく人々をお捨てにならない優しい御父として、神に信頼しているべきである。……神はわたしたちの罪のゆえに、わたしたちを捨ててしまわれることはない。わたしたちは間違いを犯し、このお方の御霊を悲しませるかもしれない。しかし、わたしたちが悔い改めて、悔悟の心をもってこのお方の御許へ来るとき、わたしたちを拒否なさることはない。取り除かれるべき障害物がある。悪感情が抱かれてきた。そして、これまで誇り、自己満足、いらだちやつぶやきがあった。これらすべてのものは、神からわたしたちを引き離してきた。罪は告白されなければならない。心のうちに恵みのより深い働きがなくてはならない。……

わたしたちはキリストの学校で学ばなければならない。このお方の義以外のものは何も、恵みの契約の祝福の一つさえわたしたちに受ける資格を与えることはできない。……わたしたちは、あたかも自らを救う力があるかのように、自分を見る。しかし、イエスはわたしたちがそうすることがまったくできず無力だからこそ、わたしたちのために死なれたのである。このお方のうちに、わたしたちの希望、わたしたちの義認、わたしたちの義がある。……

イエスはわたしたちの唯一の救い主であられる。そして癒される必要のある何百万もの人々がこのお方の差し出された憐れみを拒むにもかかわらず、このお方の功績に信頼する人はだれも減びるがままに取り残されることはない。……

あなたは、自分が罪深く、破滅した状態であることを見るかもしれない。しかし、これこそ、あなたが救い主を必要としている理由である。もしあなたに告白すべき罪があるならば、一刻の猶予もならない。これらの一瞬一瞬は、黄金の時である。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、彼は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(ヨハネ第一 1:9 英語訳)。義に飢え渇く人々は満たされる。なぜなら、イエスがそう約束されたからである。尊い救い主!このお方のみ手はわたしたちを迎えるために開かれている。そしてこのお方の大きな愛の心は、わたしたちを祝福するために待っておられる。(神のむすこ娘たち 225)

信仰によって受け入れられる

「あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によって、神の子なのである。」
(ガラテヤ 3:26)

不用意に宗教のことを語ったり、魂のかわきや生きた信仰がなくて祈ったりしても、それは何の役にも立たない。キリストをただ世の救い主として受け入れる口さきだけの信仰では、決して魂をいやすことができない。救いにいたる信仰は、頭だけで真理に同意することではない。全部わかるまでは信仰を働かそうとしない人は、神から祝福を受けることができない。キリストについて信ずるだけでは十分でない。キリストを信じなければならない。われわれを益する信仰は、キリストを自分自身の救い主として信ずる信仰、キリストの功績を自分自身のものとする信仰だけである。信仰を一つの意見として持っている人が多い。人を救う信仰は、キリストを受け入れる者が神との契約関係にはいる一つの取り引きである。真の信仰はいのちである。生きた信仰とは、活力と信頼心が増し加わり、それによって魂が勝利する力となることを意味する。(各時代の希望中巻 74, 75)

真の信仰は、キリストを自分の救い主として受け入れる信仰である。神はそのひとり子をお与えになったが、それはわたしが彼を信ずることによって、「滅びないで、永遠の生命を得るため」である(ヨハネ 3:16)。キリストのみ言葉に従ってわたしがキリストの所に行くとき、その救いの恵みを受けるのだということわたしは信じなければならない。現在生きている生涯も、「わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神のみ子を信じる信仰によって、生き」(ガラテヤ 2:20)なければならない。(ミスター・オブ・ヒーリング 37)

使徒パウロは、新しい契約のもとにおける信仰と律法の間を明らかに述べている。「このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。」「すると、信仰のゆえに、わたしたちは律法を無効にするのであるか。断じてそうではない。かえって、それによって律法を確立するのである。」「律法が肉により無力になっているためになし得なかった事を」一人間は罪深い性質を持っているから、律法を守ることができない。だから律法は、人間を義とすることはできない。「神は……御子を、罪の肉の様で罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられたのである。これは律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされるためである」(ローマ 5:1; 3:31; 8:3, 4)。(人類のあけぼの上巻 443)

神の律法はその基準

「事の帰する所は、すべて言われた。すなわち、神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。」(伝道の書 12:13)

地の基礎が据えられる前から、すべて従順な者、すべて豊かに備えられた恵みを通して品性においてきよくなる者、恵みを自分のものとすることによって神の御前に傷のないものとなる者は神の子となるという契約が結ばれた。この契約は、永遠の昔から結ばれており、キリストが来られる何百年も前にアブラハムに与えられた。なんという関心と集中力をもって、人性を取られたキリストは、人類が自分に差し出された備えを自分のものとするかどうかをご覧になろうと、観察されたことであろう。(剣対教育の基礎 403)

キリストはご自分の教えの中で、シナイから語られた律法の原則がいかに遠大なものかを示された。このお方は永遠に義の偉大な標準—裁きの座に着き、数々の書物が開かれる大いなる日に、すべての人が裁かれることになる標準—であり続ける原則をもつ律法の生きた適用をなさった。このお方はあらゆる義を成就し、人類のかしらとして、神のご要求の一つ一つの詳細に応じ、人も同じわざをなすことができることを示すために来られた。人間の代理人に提供されるこのお方の満ち満ちた恵みを通して、一人も天を失う必要はない。品性の完全は、そのために奮闘するすべての人が得ることのできるものである。これこそ、福音の新しい契約の基礎そのものである。エホバの律法は木である。福音はその木が結ぶ芳しい花であり、実である。(セクレット・メッセージ 1 巻 211, 212)

神の律法はそのご品性の写しである。それはみ国の原則を具体化したものである。この原則を拒んで受け入れない者は、神の祝福を受けることができなくなってしまう。

イスラエルの前途にあった輝かしい将来は、神の戒めに従うことによってはじめて実現されうるものであった。同じように品性が向上し、同じ祝福にあふれて、一精神と魂と身体と祝福、家と畑の祝福、現世と来世の祝福に満ちあふれること—は、従順によってのみわたしたちに可能となるのである。(キリストの実物教訓 285)

わたしたちは標準を低くすることなく、かえってわたしたちの信仰の創始者であり、完成者であられるお方を仰ぎ見つつ、それを高く掲げようではないか。(神のむすこ娘たち 215)

従順の誓い

「そして契約の書を取って、これを民に読み聞かせた。すると、彼らは答えて言った、『わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行います。』」（出エジプト 24:7）

神がご自分の民とシナイで結ばれた契約は、わたしたちの避け所であり、防壁である。……この契約は、主が昔のイスラエルと結ばれた時とまったく同様に今日も効力がある。……

これは神の民がこの終わりの時代になすべき誓いである。彼らが神に受け入れられるかどうかは、このお方との契約の条件を忠実に果たすかどうかにかかっている。神はご自分の契約のうちに、ご自分に従うすべての人を含まれた。自分の手をもっていかなる悪も行わず、正義と公道を行うすべての人にとって、約束はこれである。「わが家のうちで、わが垣のうちで、むすこにも娘にもまさる記念のしるしと名を与え、絶えることのない、とこしえの名を与える。」（イザヤ 56:5）。（SDA パイブル・コメント [E.G. 初作・コメント] 11 卷 1103）

御父は、人々のただ中で生きるご自分の選民にご自分の愛情を留めておられる。これらは、キリストがご自身の血の代価をもって贖われた民である。そして彼らが神の最高の憐れみを通してキリストの引き寄せに応じるがゆえに、彼らはこのお方の従順な子として救われるために選ばれるのである。彼らに、神の惜しみない恵み、彼らを愛してこられた愛が表される。幼子のように自らをへりくだらせるすべての人、幼子のような単純さをもって神のみ言葉を受け入れ、従うすべての人は、神の選民の中に入るようになる。（同上 6 卷 1114）

神の恵みを自分自身のものとするためには、わたしたちは自分の分を果たさなければならぬ。主は、わたしたちに代わって願いを起こしたり、実現に至らせたりしようと申し出られることはない。このお方の恵みは、わたしたちのうちに働きかけて、願いを起こさせ、実現に至らせるために成し遂げるために与えられるが、決してわたしたちの努力の代わりとはならない。（同上 4 卷 1167）

人間の代理人に、自分たちの生涯をキリストの生涯と比較させよう。……エホバの律法を生き、「わたしはわたしの父の戒めを守ってきた」と仰せになったお方の模範を模倣させよう。キリストに従う人々は、絶えず完全な自由の律法を見つめて、キリストによって自分たちに与えられる恵みを通して、神聖な要求に従って品性を形づくるのである。（神のむすこ娘たち 137）

バプテスマの役割

「すなわち、わたしたちは、その死にあずかるバプテスマによって、彼と共に葬られたのである。それは、キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえられたように、わたしたちもまた、新しいいのちに生きるためである。」(ローマ 6:4)

キリストは、バプテスマをご自分の霊的な王国への入国許可となさった。このお方は、それを御父、御子、御霊の権威の下に認められたいと望むすべての者が応じなければならないはっきりした条件となさった。バプテスマの儀式を受ける者は、自分たちが世を棄て、王家の一員、天の王の子となったことを公に宣言するのである。……

キリストはこの儀式を受ける人々に、自分たちが厳粛な契約によって、主に生きる義務が負わされていることを覚えているように命じられた。彼らはこのお方のために、自分たちに委ねられた能力をすべて用い、自分たちが第四条の安息日への従順という神のしるしを帯び、またキリストの王国の臣民であり、神性にあずかる者であるという自覚を決して失ってはならないのであった。彼らは自分たちの持っているもの、また自分たちの存在そのものを神にまったく明け渡し、自分たちの賜物をことごとく神の栄光のために用いるべきである。

御父、御子、御霊の三重のみ名のうちにバプテスマを受ける人々は、自分たちのクリスチャン生活にまぎら入るときに、自分たちが、次の招きを受け入れたことを、公に宣言するのである。「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ」と主は言われる。そして、汚れたものに触れてはならない。触れなければ、わたしはあなたがたを受け入れよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、こう言われる」(コリント第二 6:17, 18)。「愛する者たちよ。わたしたちは、このような約束を与えられているのだから、肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くならうではないか」(同上 7:1)。……

バプテスマによって神の証印を受けている人々は、主が彼らを神のむすこ娘であると宣言し、ご自分の署名を彼らの上に記されたことを覚えて、これらの言葉に注意を払おうではないか。御父、御子、そして御霊、すなわち無限にして全知であられる権威者たちは、真に神との契約関係に入る人々をお受け入れになる。そして、一つ一つのバプテスマにご臨在なされ、世を棄てて、魂の宮にキリストを受け入れたバプテスマ候補者たちを受け入れてくださる。これらの候補者は神の家族に入ったのであり、彼らの名は、小羊の命の書に刻まれている。」(SDA バブル・コメンタリ [E.G. コット・コウト] 6 巻 1075)

律法の代わりではない

「それでは、どうなのか。律法の下ではなく、恵みの下にあるからといって、わたしたちは罪を犯すべきであろうか。断じてそうではない。」(ローマ 6:15)

キリストの死が、律法に取って代わる恵みをもたらしたというのは、サタンの詭弁である。イエスの死は、十誡の戒めを変更することも、無効にすることも、あるいはほんのわずかでさえ減じることもなかった。救い主の血を通して人に提供されたその尊い恵みは、神の律法を確立するのである。人間の墮落以来、神の道德律とこのお方の恵みは分離不可能である。それらはすべての時代にわたって手に手を携えていく。(信仰によってわたしは生きる 89)

新約の福音は、罪人に合わせて、罪人をその罪のうちに救うために、標準の下げられた旧約ではない。神はご自分のすべての臣民に、従順、すなわちご自分のすべての戒めへの完全な従順を要求しておられる。(SDA バイブル・コメント [E.G. ホット・コメント] 6 巻 1072)

イエスは、わたしたちと同じようにあらゆる点において誘惑に会われたが、それは誘惑される人々をどのように救うかをお知りになるためであった。このお方の生涯はわたしたちの模範である。このお方はご自分の自発的な従順によって、人が神の律法を守ることができること、また律法への従順ではなく、律法の違反が、人をくびきにつなぐことを示しておられる。……

墮落した生活によって、自分の魂にある神のみかたちを損なった人は、単に人の努力だけでは、自らのうちに根本的な変化をもたらすことができない。彼は福音の備えを受け入れなければならない。彼は律法への従順とイエス・キリストを信じる信仰を通して、神と和解しなければならない。そのときから、人の生涯は新しい原則によって支配されなければならない。……人は鏡、すなわち神の律法を正視し、自分の道徳的品性のうちにある欠点を見分け、自分の罪を捨て去り、小羊の血の中で自分の品性の衣を洗わなければならない。……

福音の希望の感化力は、罪人が神の律法の違反のうちに生き続けながら、キリストの救いを、当然の無償の恵みとして見るように導いたりほしない。真理の光が彼の思いにわかり始め、彼が神のご要求を十分に理解し、自分の不法の程度を自覚するとき、彼は自分の方法を改革し、自分の救い主から得た力を通して神に忠実なものとなり、新しく、より純潔な生活を送る。(教会への証 4 巻 294, 295)

神の聖なる律法の要求を弱めるのではなく、人をその規則を守ることでできることろにおくのが、福音の働きである。(SDA バイブル・コメント [E.G. ホット・コメント] 6 巻 1073)

神と人への愛を含む

「イエスは言われた、『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたを愛せよ』。……そして……、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』」
(マタイ 22:37～39)

恵みの全体の働きは、愛と克己と自己犠牲的努力のたえまない一つの奉仕である。キリストが地上に滞在しておられた一刻一刻に神の愛はおさえることのできない流れとなってキリストから流れていた。キリストのみたまを吹きこまれる者はみなキリストが愛されたように愛するのである。キリストを動かした原則がお互いの間における彼らの態度の動機となるのである。

この愛は彼らが弟子であることの証拠である。……人が強制や利己心によってではなく、愛によってむすばれるとき、彼らは人間の力にまさる力が働いていることを示すのである。この一致があるとき、それは神のみかたちが人のうちに回復され、新しい生命の原則がうえつけられた証拠である。それはまた超自然的な悪の力に抵抗するのに神の性質には力があるということ、神の恵みは生れつきの心に固有の利己心を征服するというを示している。(各時代の希望下巻 167, 168)

自己がキリストの中にとけこむとき、愛は自然にわいて出る。他を助け、祝福しようとする気持ちが常に内からわき出て、天からの光が心にあふれ、顔に表わされるとき、クリスチャンの品性が完成の域に達するのである。

キリストが住まれる心に愛が欠乏することはない。神がまずわたしたちを愛してくださったために、わたしたちも神を愛するのであるならば、わたしたちは、キリストが命をおすてになってまで愛されたすべての人びとを愛するようになる。神と接触しているながら、人間と接触しないということではできない。宇宙の王座にすわっておられるキリストのなかには、神性と人性が結合しているのである。キリストに連なるものは、愛という金の鎖によって、同胞と結ばれているのである。こうして、キリストのあわれみと同情とは、わたしたちの生活にもあらわれてくる。……そして、他人の悲しみに同情することを求められることも不要になるであろう。わたしたちが、貧しい者や苦しむ者に奉仕することは、キリストが、あまねくめぐって善を行なわれたのと同様に自然にできるのである。(キリストの実物教訓 362)

神の律法は、人が神を最高に愛し、自分の隣人を自分自身のように愛することを求める。わたしたちの主イエス・キリストの恵みを通して、これが完全になされるとき、わたしたちはキリストのうちに完全になる。(SDA パイブル・コメント [E.G. 初巻・コメント] 5 巻 1097)

品性建設を含む

「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。」(ペテロ第一 2:9)

神の律法への従順は、人のうちに純潔で聖なる汚れていないあらゆるものに調和する美しい品性を発達させる。そのような人の生活の中で、キリストの福音のメッセージが明らかにされる。キリストのあわれみと、このお方の罪の力からの癒しを受けて、彼は神との正しい関係に入れられる。彼の生涯は、虚無と利己心から清められて、神の愛で満たされる。彼の神の律法への日ごとの従順は、神の王国における永遠の命を確保する品性を得させる。(神のむすこ娘たち 42)

とは言うものの、キリストは、品性を完成することがやさしいことであるとは、保証しておられない。高潔で円満な品性というものは、親から遺伝的にうけつぐものではない。また、偶然、ころがり込むものでもない。高潔な品性は、キリストの功績と恵みによって、人びとが努力することによって得られるものである。神は、タラント、すなわち、精神の能力をお与えになる。そして、わたしたちが、品性を形成するのである。品性は、自己とのきびしい戦いによって形成される。生来の傾向に対しては、争闘に次ぐ争闘をもって当たらなければならない。わたしたちは、きびしく自己を批判して、一つとして汚点を取り除かないで放っておくようなことをしてはならない。(キリストの実物教訓 305)

真理は、自分の高められた霊的な品性によって、世の与え得る力に勝った力、および真理そのものの聖なる特別な性質に見合った感化力を表すことをしない人にとって、真理ではない。真理によって聖化される人は、自分と接触するすべての人に命にかかわる救いの感化力を発揮する。これが聖書の宗教である。(牧師への証 378)

わたしたちはたえずキリストの新たな啓示と、その教えに一致した日常の経験とを必要とする。高尚な、神聖な域に到達することは可能であって、絶えず知識と美徳が向上していくことは、わたしたちに対する神のみ旨である。神の律法とは神がすべての人を招いて、「もっと高く上がってきなさい。もっともっと、きよくなりなさい」と言われるみ声の反響である。このゆえにわたしたちは日々、クリスチャン品性の完成に進むことができるのである。(ミニストリー・オブ・ヒーリング 490)

純潔を要求

「神がわたしたちを召されたのは、汚れたことをするためにではなく、清くなるためである。」(テサロニケ第一 4:7)

命は神の賜物である。わたしたちの体は、神の奉仕に用いるために与えられたので、神はわたしたちがそれに心を配り、感謝するようにと望んでおられる。わたしたちは、精神的な機能と同様に身体的な機能を持っている。わたしたちの衝動や情欲は体の中に座を占めているので、この委ねられた所有物を汚すようなことは何もしてはならない。わたしたちの体は自分たちのタラントを最高に活用するために、最も霊的な感化力の下で、身体的にできるだけ最上の状態に保たなければならない。コリント第一 6:13 を読みなさい。(健康への勧告 41)

わたしたちの体は神に属している。このお方は魂と同様に体のためにも贖いの代価を支払って下さった。……神は人間という機械の大いなる管理人であられる。わたしたちの体の管理において、このお方と協力しなければならない。神への愛は、命と健康にとって、重要不可欠である。完全な健康を持つためには、わたしたちの心が希望と愛と喜びに満たされていなければならない。

低い情欲は、厳重に警戒しなければならない。情欲が勝手に走ることを許されるとき、知覚能力が乱用され、しかも恐ろしいほど乱用される。情欲にふけると、血液が身体のある部分に巡って心臓を楽にして思いを鮮明にする代わりに、過度な量の血液が内臓に集められる。その結果は病気である。人は、悪を認め、治療されるまでは、健康になることができない。「主につく者」、すなわち、恵みの契約においてキリストに結ばれている者は、「一つの霊になるのである。不品行を避けなさい」(コリント第一 6:17, 18)。一瞬たりとも弁解するために立ち止まってはならない。サタンは、あなたが誘惑に打ち倒されるのを見ることを喜ぶ。あなたの弱い良心と、その問題を議論するために立ち止まってはならない。不法の第一歩を避けなさい。

自分は賢いと、すなわち生活の義務を自分自身の力で果たす力量があると感じているすべての人が、ヨセフの模範に従えばよいのだが。賢者は、自分の食欲や情欲に治められたり、支配されたりせず、かえってそれらを支配し、治める。彼は神に近づき、生活の義務を正しく果たすために、精神と体を整えるべく奮闘する。……サタンは破壊者であり、キリストは回復者であられる。(同上 586 ~ 588)

キリストに似たすがたへと促進する

「『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである。」
(ヨハネ第一 2:6)

福音を、生命のない理論としてではなくて、生活をかえる生きた力として示さねばならない。神は、ご自分の恩恵を受ける者たちをその力の証人にならせようと望んでおられる。……神の恵みによって人はキリストのような品性を持つことができ、神の大いなる愛の保証をよろこぶことができるということについて、神はご自分のしもべたちがあかしをたてるよう望まれる。人類が神のむすこ、むすめとしてその聖なる特権を回復し、復帰するまで神は満足することがおできにならないということについて、われわれにあかしをたてさせたいと神は望まれる。(各時代の希望下巻 375, 376)

神の民は、自分自身に誉を得ることなく、自分たちが主に、しかもただ主にのみ仕えるために自らもつとも厳粛な契約によって結ばれていることを覚えて、完全に心を尽くして、神にお仕えする民として区別されているべきである。(教会への証 2 巻 17)

神は、神の子らに完全を求められる。神の律法はご自身の品性の写しであり、またすべての品性の標準である。神がどのような人びとによってみ国を構成なさるかについてだれもまちがいをしないように、この永遠の標準がすべての者に与えられている。キリストの地上生活は神の律法の完全な表現であった。そして自分は神の子であると表明する者の品性がキリストのようになれば、彼らは神の戒めに従うのである。そのとき主は、天の家族を構成する一員として彼らを信頼することがおできになる。彼らはキリストの義の輝かしいよそおいを身にまとい、王の婚宴の座につく。彼らは血で洗われた会衆に加わる権利を持つのである。(キリストの実物教訓 294)

すべてのことは、キリストの模範という光のうちに見なければならぬ。このお方が真理であられる。このお方は世に現れるすべての人を照らすまことの光であられる。このお方のみ言葉を聞きなさい。自己否定と自己犠牲におけるこのお方の模範を模倣しなさい。そして、このお方が持つておられ、あなたに与えられるべき品性における栄光を求めて、キリストの功績を見なさい。キリストに従う人々は自らを喜ばせるべきではない。人間の標準は、弱い葦のようである。主の標準は、品性の完全である。(牧師への証 419, 420)

心をつくし

「きょう、あなたの神、主はこれらの定めと、おきてとを行うことをあなたに命じられる。それゆえ、あなたは心をつくし、精神をつくしてそれを守り行わなければならない。」(申命記 26:16)

昔、ご自分の民と結ばれた神の契約において、神が彼らのためになされた恵み深く素晴らしいみわざを忠実に認めるために指示が与えられた。神はご自分の民であるイスラエルをエジプトにおける奴隷のくびきから解放された。このお方は彼らを彼ら自身の地に導き入れ、彼らに良き嗣業と確かな定住地をお与えになった。そしてこのお方はご自分の素晴らしいみわざを認めるように彼らにお求めになった。地の初穂は神に捧げられ、感謝の捧げ物、すなわちこのお方の自分たちに対するいつくしみ深さへの感謝として、このお方にお返しするのであった。……

主がご自分の民にお与えになったこれらの指示は、神の王国の律法の原則を表現しており、それらは民の思いが無知や不明確なまま取り残されることがないよう、明確である。これらの聖句は、神が命と、健康と、現世および霊的なことにおける利点とをもって祝福されてきたすべての者の決して終わることのない義務を提示している。時代が進んでもこのメッセージが弱くなることはない。神のご要求は、神の賜物が新鮮で継続的であるのと同様に、今も拘束力があり、その重要性において新鮮である。

だれもこれらの重要な指示を忘れることがないように、キリストはそれらをご自身のみ声で繰り返された。このお方はご自分に従う人々を献身と自己否定の生活に召しておられる。このお方は、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」と言われる(マタイ 16:24)。これは、言葉どおりを意味している。自己否定と自己犠牲によるのみ、わたしたちは本当のキリストの弟子であることを示すことができる。

キリストはご自分の民に神の戒めへの従順が、現在と将来の益のためであることを思い起こさせることが重要だと思われた。従順は祝福をもたらし、不従順はのろいをもたらす。さらに、主が特別な方法でご自分の民に恩寵をお与えになったときには、公に主のいつくしみ深さを認めるようにと訓告なされた。この方法によって、このお方の御名に栄光が帰されるのであった。なぜなら、そのように認めることは、このお方のみ言葉が忠実で真実であることの証だからである。「あなたの神、主があなた……に賜わったすべての良い物をもって、……喜び楽しむなければならない」(申命記 26:11) (原稿 67、1907年)

相互の契約

「きょう、あなたは主をあなたの神とし、かつその道に歩み、定めと、戒めと、おきてとを守り、その声に聞き従うことを明言した。そして、主は先に約束されたように、きょう、あなたを自分の宝の民とされること、また、あなたがそのすべての命令を守るべきことを明言された。」(申命記 26:17, 18)

もしわたしたちが神と結んだ自分たちの契約を果たしたいならば、わたしたちの側で、自分たちの奉仕や資金に出し惜しみがあってはならない。……すべての神の戒めの目的は、神に対してばかりではなく、人類同胞に対する人間の義務を明らかにすることである。この世界歴史の終わりの時代に、わたしたちは自分たちの心の利己心のゆえに、神にこのような要求をする権利があるかと疑問をさしはさんだり、議論したりして、自分の魂から神の恵みという最も豊かな祝福を奪ってはならない。心と思いと魂は、神のみ旨の中に吸収されなければならない。そのとき、無限の知恵の命令によって構成され、王の王、主の主の力と権威によって拘束力を持つものとされた契約は、わたしたちの喜びとなる。……このお方がご自分の定めと律法への従順は、その民の命であり、繁栄であると言われただけで、十分である。

神の契約の祝福は相互的である。……神はご自分の御名の栄光のために、すなわち背教と偶像礼拝の世において、このお方の御名に誉れを帰すめに働く人々をお受け入れになる。このお方はご自分の律法を遵守する民によって高められ、彼らを「主は誉と良き名と栄えとをあなたに与えて、主の造られたすべての国民にまさるものとされる」ことができる(申命記 26:19)。

自分たちのバプテスマの誓いによって、わたしたちは主なるエホバを自分たちの支配者として、断言し、厳粛に告白するのである。わたしたちは実際に、御父と御子と聖霊の御名によって、今後、自分たちの命がこれらの大いなるお三方の命のうちに吸収されること、肉にあって生きるわたしたちの命が、神の聖なる律法への忠実な従順のうちに生きるべきことを厳粛に誓ったのである。わたしたちは自らが死んだこと、自分たちの命がキリストと共に神のうちに隠されていること、新生を経験した男女として、これからは命の新しさのうちに、このお方と共に歩むべきこと宣言した。わたしたちは自分たちの結んだ神の契約を認め、キリストが神の右に座しておられるところ、すなわち上にあるものを求めると自ら誓う。信仰の告白によって、わたしたちは主を自分たちの神として認め、自らを神の戒めに服従するために明け渡すのである。(原稿 67, 1907年)

契約の祝福

「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。人々はおし入れ、ゆすり入れ、あふれ出るまでに量をよくして、あなたがたのふところに入れてくれるであろう。あなたがたの量るその量りで、自分にも量りかえされるであろうから」。(ルカ 6:38)

神は人間の手のわざを祝福される。それは彼らが、神の分を神にお返しするためである。神は、彼らに日光と雨とお与えになる。神は草や木を繁茂させられる。神は、健康と財産を得る力をお与えになる。すべての祝福は、神の恵み深い手から来る。そして神は、男も女も、十分の一と献げ物、すなわち感謝の献げ物、心からの献げ物、また罪祭などによって神の分をお返しして、彼らの感謝を表すことを望まれるのである。……彼らは、世界のあらゆる場所における神の働きを推進するために、私心のない関心を示さなければならない。(国と指導者下巻 309)

世に警告する大いなる働きにおいて、心のうちに真理を持ち、真理を通して聖化されている人々は、自分たちに指定された役割を果たす。彼らは、什一や諸献金の支払いにおいて忠実である。教会員一人びとりは、神との契約関係によって、自己を否定し、資金のすべての無駄な浪費をしないという義務を負っている。家庭生活における儉約がないために、すでに確立されたみ働きを強め、新しい領域にはいつて行くことにおいて、自分たちの役割を果たすことができないことのないようにしよう。……

わたしは世界中のわが兄弟姉妹がたに、忠実に什一を払うという自分たちに課された責任に目覚めるよう懇願する。……あなたがたの創造主に忠実な勘定書きをつけなさい。……

ご自分のひとり子をあなたのために死に渡されたお方は、あなたと契約を結ばれた。このお方はあなたにご自分の祝福をお与えになる。そして、今度はあなたがこのお方に什一と諸献金を持つてくるように、要求なさる。……神はご自分が人間の代理人と結ばれた契約に対して、彼らが真実であるようにとお命じになる。「わたしの宮に食物のあるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい」(マラキ 3:10) とこのお方は言われる。(管理者への勧告 74, 75)

神の人への賜物のなんと大いなることか、わたしたちの神のような方があろうか! 決して越えることのできない寛大さをもって、このお方は与えてくださった。それは、ご自分が反逆の人の子らを救い、彼らをご自分の目的を認め、ご自分の愛を見分けられるように連れ帰るためであった。あなたは自分の捧げ物と諸献金によって、「ご自分のひとり子を賜った」お方に良すぎるものは何もないと考えていることを示すであろうか。(同上 19)

キリストの血により批准

「だから、あなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むごとに、それによって、主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである。」(コリント第一 11:26)

過越節に代わるものとして、聖餐式の儀式が設立される際、キリストはご自分の教会に、人類のためのご自分の大いなる犠牲の記念を残された。「わたしの記念としてこのように行いなさい」とこのお方は言われた。これは、二つの制度と彼らの二つの大きな祭りの間の転換期であった。一つは永遠に閉じるのであった。このお方が設立されたばかりのもう一方は、その代わりとなり、このお方の死の記念として、全時代にわたって続くのであった。……

ご自分の弟子たちと共にパンとぶどう酒にあずかられたときのキリストのこの最後の行為において、このお方は彼らの贖い主として、新しい契約、すなわちその中で、信仰によってキリストを受け入れるすべての人に、この生涯においても将来の不死の生涯においても、天が与えることのできるすべての祝福を与えると記され、また印されていた契約によって約束された。この契約の署名はキリストご自身の血、すなわち古い犠牲の捧げ物がつねにこの方の選民の思いの前におぼえさせた血によって批准されなければならなかった。キリストはご自分を信じ、受け入れるすべての人の罪の許しのために、ご自分の命をお与えになったその犠牲を思い起こさせるために、この晩餐をしばしば記念するよう計画なさった。(伝道 273 ~ 276)

救い主が死なれたことによって暗黒の勢力は勝利したように見え、彼らはその勝利をよろこんだ。しかしイエスは、割れたヨセフの墓から勝利者としてあらわれた。(各時代の希望上巻 193)

イエスは、ご自分の犠牲が天父によって受け入れられたとの確証が与えられるまではご自分の民から尊敬を受けようとしなかった。イエスは天の宮廷へのぼり、その血によってすべての人が永遠の生命を得られるように、イエスが人類のために払われたあがないは充分であったとの保証を神ご自身から聞かれた。天父はキリストとの間の契約、すなわち悔い改めて従う者たちを受け入れ、み子を愛されるように、彼らを愛されるという契約を批准された。キリストはそのみわざを完結して、「わたしは人を精金よりも、オフルのこがねよりも少なくする。(英訳・とうといものとする)」との誓いを果たされるのであった(イザヤ書 13:12)。天と地のいっさいの権力はいのちの君に与えられたので、イエスは、ご自分の権力と栄光をわけ与えるために、罪の世にある弟子たちのもとへお帰りになった。(各時代の希望下巻 324)

キリストの贖罪によって印された

「わたしたちは、御子にあって、神の豊かな恵みのゆえに、その血によるあがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである。」(エペソ 1:7)

十字架上のキリストは、人をご自分の律法の違反ゆえの神に対する悔い改めへと引き寄せるだけでなく—神は許される者をまず悔い改めさせる—、キリストは正義を満足させられた。このお方はご自身を贖罪のために差し出された。このお方のほとぼしる血潮、破られた体は、破られた律法の要求を満足させ、こうして、このお方は罪が生じさせた深淵に橋をかけられた。このお方が肉において苦しまれたのは、ご自分の傷つけられ、砕かれた体をもって、無防備な罪人を覆うことができるためであった。カルバリーにおけるこのお方の死で獲得された勝利は、宇宙に対するサタンの告発する力を永遠に打ち破り、神にとって自己否定は不可能であるから、人類家族にもそれは重要ではないとする彼の告発を沈黙させた。(セクレット・メッセージ 1巻 341)

キリストには罪がなかった。そうでなければ、人間の肉体におけるこのお方の命も、十字架上のこのお方の死も、他のだれかの死と同様に、罪人のために恵みを獲得する価値はなかったのである。このお方は人性をご自身に取られたが、それは神性と結合に入れられた命であった。このお方は祭司として、また犠牲としてご自分の命を捨てることがおできになった。……このお方はしみなく、神にご自身を捧げられた。

キリストの贖罪は、とこしえの恵みの契約を永遠に印された。神は条件に基づいて人類家族への恵みの自由な伝達を中断しておられたが、それらをすべて満たすものであった。そのとき、アダムの家系の最も罪深い者に対して、恵み、憐れみ、平安、愛を最も自由に働かせることを妨げていたすべての障壁は崩された。(SDA バイブル・コメント [E.G. 初巻・コメント] 7巻 933)

天の法廷で、キリストは教会のために弁護しておられる。すなわち、キリストが血のあがないの値を支払われた人々のために弁護しておられるのである。どんなに世紀や時代を重ねても、キリストのあがないの犠牲は効力を減じない。生も死も、高いものも深いものも、キリスト・イエスにおける神の愛からわれわれを引き離すことはできない。それはわれわれがしっかりとキリストをつかんでいるからではなく、キリストがわれわれをしっかりとつかんでいるからである。もし救いがわれわれ自身の努力にかかっているとすれば、われわれは救われることができない。しかし救いは、すべての約束を支持しておられる方にかかっているのである。キリストをとらえるわれわれの力は弱いように見えるかもしれないが、キリストの愛は兄の愛のようで、主と結ばれているかぎり、だれも主のみ手からわれわれを引き離すことはできない。(患難から栄光へ下巻 256)

仲保者キリスト

「ところが、キリストは、ほんとうのものの模型にすぎない、手で造った聖所にはいらなくて、上なる天にはいり、今やわたしたちのために神のみまえに出て下さったのである。」(ヘブル 9:24)

アダムとエバの罪は、神と人との間に恐るべき分離を生じさせた。そして、キリストは墮落した人類と神の間に足を踏み入れ、人に言われた。「あなたはなお御父のみ許に行くことができる。神が人と和解され、人が神に和解することのできるために考案された計画がある。仲保者を通して、あなたは、神に近づくことができる」。そして、今、このお方はあなたのためにとりなしておられる。このお方はあなたのために嘆願しておられる大祭司である。そしてあなたはイエス・キリストを通して御父のみ許へ来て、自分の事情を提示することができる。こうして、あなたは神に近づく道を見出すことができる。(教会への証 2 巻 591)

キリスト・イエスは絶えず祭壇のところで、時々刻々と世の罪のために犠牲を捧げておられる。このお方は人の手によらず主によって建てられた真の幕屋に仕えておられる。型であり影であったユダヤ人の幕屋には、もはや何の力もなかった。型であった日ごとの、また年ごとの務めは、もはやとり行われなかった。しかし、罪を絶えず犯すために、仲保者を通しての贖罪は不可欠である。イエスは、かつてほふられた小羊でなしたように、神のみ前でご自分の注がれた血を捧げて、務めをしておられる。……

宗教的な礼拝、祈り、讃美、罪の悔い改めの告白が、真の信者から、香のように天の聖所にのぼる。しかし、人類という墮落した経路を通っているため、それらは血によって清められない限り汚れており、神にとって価値のあるものとは決してならない。……地上の幕屋からの香はみな、キリストの血潮の清めの滴で湿らせなければならない。このお方は、地上の墮落のしみがなくご自身の功績の香炉を御父のみ前に持っておられる。このお方はこの香炉にご自分の民の祈りや讃美や告白を集めて、これらにご自身のしみのない義をお入れになる。そのとき、キリストの贖いの供え物の功績に香り、香は神のみ前に完全にあますことなく受け入れられるものとして立ち上る。……

ああ、従順や悔い改めや讃美や感謝におけるすべてのものが、キリストの義という赤々と燃える火の上におかれなければならないことを、すべての人が見る事ができればよいのだが。(SDA バイブル・コメンタリ [E.G. 初巻・コト] 6 巻 1077, 1078)

契約の血

「永遠の契約の血による羊の大牧者、わたしたちの主イエスを、死人の中から引き上げられた平和の神が、……あなたがたが御旨を行うために、すべての良きものを備えて下さるようにこい願う。」(ヘブル 13:20, 21)

多くの人々にとって、いにしへの時代に、なぜこれほど多くの犠牲の捧げ物が要求されたか、なぜこれほど多くの血を流す犠牲が祭壇に導かれたかは神秘である。しかし、絶えず人のおかれ、思いと心に刻まれた偉大な真理はこれである、「血を流すことなしには、罪のゆるしはあり得ない」(ヘブル 9:22)。一つ一つの血を流す犠牲に「世の罪を取り除く神の小羊」が象徴された(ヨハネ 1:29)。

キリストご自身が礼拝のユダヤ制度の創始者であられた。その制度の中で型と象徴によって、霊的かつ天の事柄があらかじめ影として示されたのであった。多くの人々はこれらの捧げ物の真の意味を忘れた。そしてキリストを通してのみ罪の許しがあるという偉大な真理が彼らにとって失われていた。犠牲の捧げ物の数を増し加えても、雄牛ややぎの血は、罪を取り去ることはできなかった。……

一つ一つの犠牲の中で具現化し、一つ一つの儀式において印象づけられ、聖職にある祭司によって厳粛に説かれ、そして神ご自身によって繰り返し教えられた一つの教訓—それは、キリストの血によってのみ罪の許しがあるということであった。(SDA バイブル・コメント [E.G. ホット・コメント] 7巻 932, 933)

昔、信徒たちは今と同じ救い主によって救われたのだが、それは覆われた神であられた。彼らは神の憐れみを象徴の中で見たのであった。……キリストの犠牲は、ユダヤ制度全体の栄光に満ちた成就である。……罪のない捧げ物としてキリストが頭を垂れて死なれたとき、全能者の見えない御手によって宮の覆いが真二つに裂かれたとき、新しい生きた道が開かれた。今やすべての人がキリストの功績を通して、神のみ許へ近づくことができた。人が神に近づくことができるのは、覆いが裂かれたゆえである。彼らは祭司や儀式の犠牲に頼る必要はなかった。個人的な救い主を通して、まっすぐに神のみ許へ行く自由が、すべての人に与えられた。(同上 932)

思いすべて、魂すべて、心すべて、力すべては、神の御子の血によって買われる。(牧師への証 130)

契約と安息日

「ゆえに、イスラエルの人々は安息日を覚え、永遠の契約として、代々安息日を守らなければならない。これは永遠にわたしてイスラエルの人々との間のしるしである。」。(出エジプト記 31:16, 17)

主がご自分の民イスラエルをエジプトから救出して、彼らにご自分の律法を委ねられたとき、安息日の遵守によって彼らが偶像礼拝者と区別されるべきことをお教えになった。……

安息日は、イスラエルが地上のカナンに入るためにエジプトから出てきたときに彼らを区別したしるしであったように、今、それは神の民が天の休息に入るために世から出てくるときに彼らを区別するしるしである。安息日は神とその民の間に存在する関係のしるしであり、彼らが神の律法を尊ぶしるしである。それはこのお方の忠実な臣民と不法者を区別する。……創造主としての神のしるしとして世に与えられた安息日はまた、聖化するお方としての神のしるしでもある。万物を創造された力は、魂をこのお方の姿に再創造する力である。安息日を聖なる日として守る人々にとって、それは聖化のしるしである。真の聖化は神との調和であり、品性においてこのお方と一つであることである。それはこのお方のご品性の写しであるこれらの原則への従順を通して受ける。そして安息日は従順のしるしである。心から第四条に従う人は、律法全体に従うのである。彼は従順を通して聖化される。

イスラエルにとって同様、わたしたちにとって、安息日は、「永遠の契約として」与えられている。このお方の聖日を尊ぶ人々にとって、安息日は神が彼らをご自分の選民としてお認めになるしるしである。それはこのお方がご自分の契約を彼らに成就してくださる誓いである。神の統治のしるしを受け入れるすべての魂は、自らを神聖な永遠の契約の下におくのである。彼は自らを従順という黄金の鎖に堅く結びつけるが、その一つ一つの環は約束である。

十条すべての中で、第四条だけが偉大な律法定定者、すなわち天地の創造主の印を含んでいる。この戒めに従う人々は、自らにこのお方のみ名を受け、それにかかわるすべての祝福は彼らのものである。(教会への証 6 巻 349, 350)

安息日は、何一つその意味を失ってはいない。それはなおも神とその民の間のしるしであり、また永遠にそうなのである。(教会への証 9 巻 18)

神の永遠の誓い

「主はとこしえに、その契約をみこころにとめられる。これはよろず代に命じられたみ言葉であって」(詩篇 105:8)

神はご自分がなされた一つ一つの約束の背後におられる。あなたの聖書を手にとって、言いなさい。「わたしはあなたが仰せになったとおりにしました。あなたに『求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう』(マタイ 7:7) とのみ約束を差し出します。」……

み座のまわりにある虹は、神が真実であって、変化とか回転の影とかいうものがない保証である。わたしたちは、神に対して罪を犯し、神の恵みに浴することができないものになった。それにもかかわらず、「み名のために、われわれを捨てないでください。あなたの栄えあるみ位をはずかしめないでください。あなたがわれわれにお立てになった契約を覚えて、それを破らないでください」という驚くべき祈りのことばを神ご自身が、わたしたちの口に入れてくださったのである(エレミヤ書 14:21)。わたしたちが、自己の無価値なことで罪とを告白して、みもとに近づくならば、神はわたしたちの叫びに耳を傾けると神ご自身がお約束になった。神がわたしたちに言われたことばが成就するためには、神の栄えあるみ位がかけられているのである。(教会への証 8 巻 23)

自らを奉仕のために主にお捧げし、何も差し控えないすべての人に、測り知れない結果を成し遂げるための力が与えられる。主なる神は、真理への従順を通して聖化される一人ひとりにより力と恵みを供給するという永遠の誓いを必ず果たして下さるのである。

ネヘミヤは諸王の王のみ前に押し進み、川の流れを返すように心の流れを返すことのできる力を自分の味方につけた。〔ネヘミヤ 1 章と 2 章参照〕。(教会への証 7 巻 30, 31)

緊急の時にネヘミヤが祈ったように祈ることは、他の形式の祈りをするのが不可能な場合に、キリスト者が用いることができる方法である。人込みの中で労苦しながら仕事をしている人々は、神の導きを祈り求めることができる。……突然困難や危機が訪れた場合には、彼を信じる忠実な者の呼ぶ声に答えて、いつでも来て助けるとみずから約束なされたかの助けを呼び求めればよいのである。人はどんな環境、どんな状態のもとにあっても、悲しみと労苦に圧倒され、あるいは誘惑に激しく襲われるときに、契約を守られる神の尽きない愛と力に、確認と支持と援助を見いだすことができるのである。(国と指導者下巻 234)

永遠にして変わりが無い

「さあ、われわれは、永遠に忘れられることのない契約を結んで主に連なろう。」
(エレミヤ 50:5)

契約とは、それによって両者が自らと相手にしかるべき条件を果たす義務を課すことへの同意である。こうして、人間は神のみ言葉に明示された条件に従うために神との契約に入る。その行いは、その人がこれらの条件を尊んでいるか否かを示す。

人は契約を守られる神に従うことによって、すべてを得る。神の特質が人に与えられ、人が憐れみと同情を働かせることができるようにする。神の契約は、このお方の変えざるご品性を保証している。……わたしたちはこのお方のご要求とわたしたちの義務が何であるかを知らなければならない。神のご契約の条件は、これである。「心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』。これらが命の条件である。「そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」とキリストは言われる(ルカ 10:27, 28)。(SDA パイブル・コメント [E.G. 初ト・コト] 7 巻 932)

神の律法は、神ご自身の指で石の板に記され、こうしてそれが決して変えられることも無効にされることもありえないことを示した。それは永遠にわたって保持されるものであり、このお方の統治の原則のように不朽のものである。……キリストは人が神のみかたちに回復されることを可能とするためにご自分の命を与えてくださった。人を真理への従順へ引き寄せるのは、神の恵みの力である。(両親、教師、生徒への勧告 248, 249)

わが兄弟がたよ、万軍の主なる神に結びつきなさい。このお方をあなたがたの恐れとし、あなたがたのおのきとしなさい。……悩みの時が目の前にあるが、もしわたしたちがクリスチャンの交わりのうちに共に立ち、だれも一番をねらって争わないならば、神はわたしたちのために力強く働いてくださる。……

このお方はわたしたちのすべての必要をご存じである。このお方はあらゆる力を持っておられる。このお方はご自分の僕らに彼らの必要が要求するだけの能力を授けることがおできになる。このお方の無限の愛と同情は弱ることがない。このお方は全能の大権にやさしい羊飼いの寛容と心遣いを結びつけて下さった。わたしたちはこのお方がご自分のみ約束を果たされないのであるかと恐れる必要はない。このお方は永遠の真理であられる。このお方はご自分を愛する人々と結ばれた契約を、決して変えることはない。ご自分の教会へのみ約束は永遠に続く。このお方は教会を永遠にすぐれたもの、代々にわたる喜びとなさるのである。(教会への証 8 巻 38, 39)

契約の象徴

「さらに神は言われた、『これはわたしと、あなたがた及びあなたがたと共にいるすべての生き物との間に代々かぎりなく、わたしが立てる契約のしるしである。すなわち、わたしは雲の中に、にじを置く。これがわたしと地との間の契約のしるしとなる。』」（創世記 9:12, 13）

雲の中に美しく変化に富んだ虹、すなわち人と結ばれた偉大な神の契約のしるしをおいてくださるとは、あやまちに陥っている人類に対するなんとという同情であろう。……何世代も後の子孫が、雲の中の虹を見たときに、……民が自らあらゆる種類の悪をなすがままにしたゆえ、洪水によって昔の世界が滅ぼされたこと、またいと高き者のみ手が、二度と地に洪水をもたらさないしるしとして虹をかけられ、それを雲の中におかれたことを、彼らの親が説明できるようにするのが、神のご計画であった。雲の中のこの象徴は、すべての人の信仰を固め、神への信頼を堅くするべきであった。なぜなら、それは人に対する神聖な憐れみといつくしみのしるしだったからである。……

天でみ座の回りとキリストの頭の上にある虹は、地をとり囲む神の憐れみの象徴として表されている。人がその大いなる悪によって神の怒りを引き起こすとき、人間の仲保者であられるキリストは、人のために嘆願し、誤りに陥っている人類に対する神の偉大な憐れみと同情の証拠として、雲の中の虹を指し示される。（霊的賜物 3 巻 74, 75）

天使たちは、この尊い人への神の愛のしるしを見るとき、喜ぶ。世の贖い主はそれを見ておられる。なぜなら、この虹が人へのしるし、あるいは約束の契約として、諸天に現れるようにしたのは、このお方の手段を通してであったからである。神ご自身が雲の中の虹をご覧になり、ご自分と人との間のとこしえの契約を覚えておられる。……

わたしたちが美しい光景を眺めるとき、神ご自身が、このご自分の契約のしるしをご覧になっていること、またこのお方がそれをご覧になるとき、それをお与えになった地上の子らを覚えておられることを確信して、神にあって喜ぶことができる。彼らの苦悩、危険、試練は、このお方から隠されてはいない。わたしたちは希望のうちに喜ぶことができる。なぜなら、神の契約の虹がわたしたちの上にかかっているからである。このお方がご自分の保護しておられる子らをお忘れになることは決してない。（SDA パイブル・コメント [E.G. 初作・コメント] 1 巻 1091）

研究 1

最後の出来事



「短い患難」

Little time of Trouble

今月より、預言が教える最後の出来事について、学んでいきます。「キリストのみ言葉によって弟子たちに将来がはっきり示されていたように、われわれにも将来のことが預言の中にはっきり示されている。恩恵期間の終わりに関係のある出来事と、悩みの時のために備える働きとが、はっきり示されている」(各時代の大争闘下巻 359)。

今回は「短い患難」について研究してみましょう。「患難」という言葉は何を意味するのでしょうか。証の書には次のようにあります。「真理を擁護するための働きに加わる者がキリストの苦難にあずかるとはどんな意味かを、実際的な経験を通して知る時が迫って来ている」(レビュー・アンド・ヘラルド 1900 年 5 月 29 日)。

「実際に迫害のあらしがわたしたちに吹き荒れるとき、真の羊は真の羊飼いの声に聞き従う。失った羊を尋ねだして救うための犠牲的な働きが成し遂げられる。そして、おりを離れてさ迷っていた多くの羊が戻ってきて、偉大な牧者に従うのである」(AST1903 年 1 月 26 日付録)。

「われわれは、どのような時代にもなかったような危機の門口に立っている。火事、洪水、地震、戦争、流血などの神の刑罰は、続々とくだっている」(国と指導者上巻 245)。

「抑制する神の御霊は、今すでにこの世界から取り去られつつある。竜巻、嵐、大暴風雨、火事、洪水、海陸の災害が相次いで矢継ぎばやに起こっている。科

学はこれらすべてを説明しようとしている。しるしがわれわれの周囲を幾重にも囲み、神の御子の来臨が近いことを告げているが、これらは真の原因以外のあらゆるもののせいにされている」(教会への証 6 巻 408)。

「世界情勢は、わたしたちに困難な時がまさに降りかかろうとしていることを示している。毎日の新聞は、近い将来に、恐ろしい戦争が起こることを示す徴候で満ちている。大胆な強奪犯罪は頻発し、ストライキはありふれた出来事となった。窃盗や殺人はいたる所で行われている。悪魔にとらわれた人間が、男女や幼い子供たちの生命を奪っている。人類は罪悪で逆上しており、あらゆる種類の悪事がはびこっている」(教会への証 9 巻 11)。

前記の証は今日私たちの時代にすでに成就していることをはっきり示しています。これは神を知らず、また知ろうともしないすべての者にとっての患難であることがわかります。しかし、キリスト者において特に起こるべき事件、すなわち「短い患難」とはどんなことであるかについて研究してみましょう。

1. なぜ「短い患難」というのか?

『『悩みの時の開始』』とここに(初代文集 97)言われているのは、災害が降り始めるときのことではなくて、キリストがまだ聖所におられて、災害が降り始める直前の短い期間をさしている」(初代文集 173)。

2. SDA信徒たちにとって重要な事件

「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば(読者よ、悟れ)」(マタイ 24:15)。「この預言の言葉を朗読すると、これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわいである。時が近づいているからである。」(黙示録 1:3)。

「キリストはエルサレムに臨む滅亡のしるしを弟子たちに与え、のがれる方法を彼らに語られた。『エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは、その滅亡が近づいたときとりなさい。…それは、聖書にしるされたすべての事が実現する刑罰の日であるからだ』」(各時代の希望下巻 95)。

「初代の弟子たちのように、われわれも、わびしい、人里離れた場所に隠れ家を探さねばならない時はさほど遠くない。ローマ軍によるエルサレム包囲がユダヤのキリスト者にとって逃避の合図となったように、この国(米国)が権力を

帯びてローマ教の安息日を強要する法令を出すようになったら、それはわれわれに対する警告となる」(教会への証 5 巻 464)。

「神の律法にかえて人間の律法を代用すること、すなわち聖書の安息日の代わりに人間の権威のみに基づく日曜日を高めることが、ドラマの最終幕となる」(教会への証 7 巻 141)。

前記の証を通して古代ユダヤ人のエルサレムの滅亡と、終わりの時代の神の民と公言するプロテスタントの最後がわかります。最後のしるし、「聖書にしろされたすべての事が実現する刑罰の日」とはどんな日であり(ルカ 21:22)、キリスト者各個人と世に、どのようなことが起こるのかについてイエスご自身が言われたみ言葉を読んでみましょう。

「そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。屋上にいる者は、家からものを取り出そうとして下におりな。畑にいる者は、上着を取りにあとへもどるな。その日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である。」(マタイ 24:16～19)。「人々が平和だ無事だと言っているその矢先に、ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むように、突如として滅びが彼らをおそって来る。そして、それからのがれることは決してできない。」(テサロニケ第一 5:3)。

3. 患難

「そのとき人々は、あなたがたを苦しみにあわせ、…」(マタイ 24:9)。

「またあなたがたは、わたしのために長官たちや王たちの前に引き出されるであろう。それは、彼らと異邦人に対してあかしをするためである」(マタイ 10:18)。

「その時このような背教者たちは最も苦い敵となり、その力の限りを尽くして自分の以前の兄弟たちを圧迫し、中傷し、彼らに対する怒りをかき立てる。この日がわたしたちの眼前に迫っている。教会員たちは個人個人が試練を受け、また試されるのである」(教会への証 5 巻 463)。「サタンとの最後の大争闘において、神に忠実な者は、この世の一切の支持がたたれるのを見る。彼らは地上の権力に従うために神の律法を破ろうとしないので、売ることも買うことも禁じられる。ついには、彼らを殺せとの布告が出される(黙示録 13:11～17 参照)」(各時代の希望上巻 132, 133)。

4. 患難が起こる原因

わたしたちが終わりの時代、特に「短い患難」が起こる原因が何であるかを知るためには、エルサレムの滅亡の前にどんなことが起きたかを知ることが重要です。なぜならば、「イエスは弟子たちに答えるにあたって、エルサレムの滅亡とご自分がおいでになる大いなる日とを別々にとりあげられなかった」(各時代の希望下巻 92)からです。そうであれば、ユダヤ人たちが滅ぼされた原因は何であったのでしょうか。

「贖い主をこぼむ罪のうちにあるエルサレムの現状と、エルサレムが、その傷をいやすことのできるただひとりのおかたであるイエスを受け入れていたらどうなっていたかということ、イエスをご存じであった」(各時代の希望下巻 11)。

「キリストをこぼんだ民は、間もなく彼らの都と国が滅ぼされるのを見るのであった。彼らの栄光はうち砕かれ、風の前のちりのように吹き散らされるのであった。ではいったいユダヤ人を滅ぼしたものは何であったのだろうか。それは、もし彼らがあるの上に築いていたら彼らの安全となったはずの岩であった。それはあざけられた神の恵み、拒絶された義、軽んじられたいつくしみであった。…ユダヤ人がキリストを十字架につけたことの中に、エルサレムの滅亡が含まれていた」(各時代の希望下巻 45, 46)。

「キリストを拒んだことによって、ユダヤ民族はゆるされない罪を犯した」(各時代の希望中巻 42)。

それでは神の民に患難と迫害が迫っており、世の終わりが来る原因は何でしょう。「王の門の内にいる王の侍臣たちは皆ひざまずいてハマンに敬礼した。…ハマンはモルデカイのひざまずかず、また自分に敬礼しないのを見て怒りに満たされた」(エステル記 3:2、5)。「シャデラク、メシャクおよびアペデネゴは王に答えて言った、『ネブカデネザルよ、この事について、お答える必要はありません。もしそんなことになれば、わたしたちの仕えている神は、その火の燃える炉から、わたしたちを救い出すことができます。また王よ、あなたの手から、わたしたちを救い出されます。たといそうでなくても、王よ、ご承知ください。わたしたちはあなたの神々に仕えず、またあなたの立てた金の像を拝みません」(ダニエル 3:16～18)。「またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての人に憎まれるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」(マタイ 10:22)。「ユダヤ人の大きな罪は、彼らがキリストを拒んだことであった。キリスト教会の大きな罪は、天地を支配する神の統治の基礎である神の律法の拒否ということである」(各時代の大争闘上

卷 8)。

「神の民が、第七日目の安息日を清く守るために迫害の魔手を感じる時が迫っている」(教会への証 9 卷 229)。

5. 短い患難の時の殉教者

「兄弟は兄弟を、父は子を殺すために渡し、また子は親に逆らって立ち、彼らを殺させるであろう」(マタイ 10:21)。「神の証人たちが捕らえられたり、裁判を受けたり、投獄されたりしたときに、神はご自身をあらわされた。それでも裁判官たちは彼らに死刑を宣告した。『この世は彼らの住む所ではなかった』(ヘブル 11:38)。ユダヤ人たちは、彼らを殺したことによって、神のみ子を新たに十字架につけた。同じことが再び起こるであろう。当局は宗教の自由を制限する法律を作るであろう。…この働きはおし進められて、ついには越えることのできない限界にまで達するであろう」(各時代の希望下巻 94)。

「二つの軍隊ははっきりと別々に分かれて立つ。そして、この相違が明確なために、真理を確信した多くの者が、神の戒めを守る民の側に加わるのである。闘いの中でこの壮大な働きがなされるとき、幕を閉じる最後の争闘に先立って、真理を守るために立っていた多くの者が投獄され、また多くの者が自分の命のために都市や町から逃げ出し、また他の多くの者がキリストのための殉教者となるであろう」(セレクトド・メッセージ 3 卷 397)。

6. わたしたちの心の準備

「彼らがあなたがたを引き渡したとき、何をどう言おうかと心配しないがよい。言うべきことは、その時に授けられるからである。語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあつて語る父の霊である」(マタイ 10:19, 20)。

わたしたちは上記のみ言葉によって、終わりのときに神の民が苦しみに直面するとき、あわれみ深い主が聖霊を通して共にご臨在くださるという約束を知ることができます。わたしたちは、このような迫害と試練を受けなくてはならない理由の全容を知ることができなくても、これがまだ真理を知らない多くの魂に最後に真理を知らせる神の方法であるということを理解しなければなりません。ですから、わたしたちの持つべき信仰は、「わたしとわたしの侍女たちも同様に断食しましょう。そしてわたしは法律にそむくことですが王のもとへ行きます。わたしが

もし死なねばならないのなら、死にます」と語ったエステルのもと同様でなければなりません(エステル記 4:16)。このような者のために次の約束が与えられました。

「神はわれらの避け所また力である。悩める時のいと近き助けである。このゆえに、たとい地は変り、山は海の真中に移るとも、われらは恐れぬ。たといその水は鳴りとどろき、あわだつとも、そのさわぎによって山は震え動くとも、われらは恐れぬ。……万軍の主はわれらと共におられる。ヤコブの神はわれらの避け所である」(詩篇 46:1～3, 7)。

「彼らはあなたのおきてを破りました。今は主のはたらかれる時です」(詩篇 119:126)。

「そのとき神は、戒めを守る忠誠な民のために手を出されるのである」(各時代の希望下巻 94)。

「真理と誤りとの間の最後の大争闘は、この論点において戦われるのである。そしてわれわれは、その結果について何の疑惑ももたないのである。エステルとモルデカイの時代におけるのと同様に、今日においても主は、神の真理と神の民とを擁護されるのである」(国と指導者下巻 209)。

「それだけではなく、患難をも喜んで。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである」(ローマ 5:3, 4)。

7. 主の約束

「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(マタイ 28:20)。

「しかし、戦いはどんなに絶え間なく続いて、だれひとりとして孤軍奮闘するままに放置されていない。天使たちは、へりくだって神の前を歩く者を助け保護する。主はご自分に信頼する者を裏切られることはない。主の民が、悪から保護されることを求めて主に近づくときに、主は彼らを愛しあわれんで、敵の前で彼らの上に旗を掲げられる。彼らに触れてはならない。彼らはわたしのものである。わたしは彼らをわたしのたなごころに彫り刻んだと、主は言われる」(国と指導者下巻 177, 178)。

「天国は、義のために苦しむ者のそば近くにある。キリストはその忠実な民と

利害を一つにされる。キリストは彼の聖徒が苦しむときに苦しまれる。そして彼の選民に触れる者は、だれでもキリストに触れるのである」(国と指導者下巻155)。

「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあつて平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」(ヨハネ 16:33)。

(50 ページの続き)

なら、これらの掃除屋が食べるのは、みな死んで、いたんだ動物の肉—腐肉(ふにく)—であって、死んでからしばらく時間がたち、たいていすでにかなり腐ってだめになった肉だからです。神は、この働きができるように、ハゲワシ自身は害から守ってくださいますが、人は鳥の血流にながれているあらゆる毒から、たやすく病気になってしまいます。

しかし、みなさんは、**ときどきハゲワシのようにふるまう人がある**のを知っていますか？これは、わたしたちが人の欠点をいつまでも考え、あら探しをするときにおこります。

「悪いわさが始まってごらんなさい。いかにすみやかに、人のくちびるからくちびるへと伝わっていくことであろう！どれほど多くの人々が、ごみ山の上にいる**ハゲワシのように**、それを楽しむことであろう。」(サイズ・ワ・タイムズ 1882年3月9日〔強調付加〕)

それとは反対に、真のクリスチャンは、「イエスのことを、天のことを、クリスチャンの義務やクリスチャンの戦いのことを、そしていかにサタンの方に抵抗するのに成功するかを語る。彼らは**ハゲワシのように**自分たちが他人の欠点だと考えるものを餌食(えじき)にしたりはしない。」(この日を神と共に 141〔強調付加〕)

わたしたちが他の人が完全ではないのをいちいち見て、文句を言うのは、とても簡単です。しかし、賢い助言は次の通りです。

「これ以上あら探しはやめなさい。もしわたしが多くのアメリカハゲワシを見、死体をさがして待っている多くのハゲワシを見るとき—わたしたちはそれをまったく望まないのである。わたしたちは他人にある欠点を探したくはないのである。一番に注意を払いなさい、そうすればあなたのできるすべてのことを得るようになる。もしあなたが一番に注意を払うなら、そして、もし真理に従うことによって、あなたの魂を純潔にするならば、あなたは何か分かち合うべきものを得る。あなたは、他の人々に与える力を得るようになる。」(スバルディング&マゴウ・コレクション 173, 174〔強調付加〕)

なんと大きな目標でしょう。代わりにこの目標を追い求めましょう。そして、神に定められた働きをなすために創造されたハゲワシは、そのままにしておきましょう。わたしたちにその働きを定められたのではないのですから！

黒豆ごはん

〔材料〕

黒豆 1/2 カップ強

胚芽米 2 カップ

塩 小さじ 1/2

〔作り方〕

1. 黒豆を洗い、そのまま食べられるくらいになるまで、フライパンでよく炒ります。
2. 水につけて色が良く出るまで、一時間ほどひたします。
3. 炊飯器に軽く洗った胚芽米を入れて、色が出たお水と一緒に豆と塩を加え、2合半の目盛りまでお水を足して、ご飯を炊きます。
4. 炊き上がったごはんをよそいで、ごま塩をかけて、できあがり。

香ばしくて、ひと味変わったおいしい豆ご飯。

手軽に作れるのも、魅力ですよ。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係
是非お申し込み下さい。



書籍

【永遠の真理】 聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】 は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



ハゲワシの価値は どこにあるか？

「なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めないのか。」(マタイ 7:3)

空中を高く上っていく鳥を見るのは最高です。なんなく、空を横切って、滑空(かっくう)しているようです。わたしたちのすばらしい創造主は、多くの種類の鳥たちに、どのようにして風の流れをとらえ、ほとんど羽ばたきもしないで、その流れに乗ることができるかを教えて下さいました。そして、わたしたちが下から、青い澄んだ空に対してくっきりと対照的な黒いかたちを見るとき、すごいなあ、と思います。

しばしば、わたしたちは大きな鳥が空を舞い上がっているのを見ると、大きなはやぶさに違いない、とか、堂々としたわしだろう、と想像します。ときにはそのとおりでしょう。しかし、もしかするとそれは単に「ハゲワシ」として知られる鳥かもしれません。

たとえば、ハゲワシはしばしば大きな輪を描いて飛び、何度も何度もまわります。こうして乱気流を起こし、下にある物のおいが、もっとするどくわかるようになります。この能力とするどい視力は、ハゲワシがにおいて死んだ動物が地上のどこにあるかをさがしあてる助けとなります。それから、その鳥はすばやく次の食事のために急降下することができるのです。ハゲワシにこの能力を与えることによって、神はわたしたちみんなのためのより良い環境を保つ助けとなるように、なんと**有能な「掃除夫(そうじふ)」**を備えてくださったことでしょう！しかし、それはまた、レビ記 11:14 と申命記 14:13 に、これらの被造物(ひそうぶつ)を主が「汚れた」ものだと言われた所以(ゆえん)です。人々は、決して何があっても、それらの肉を食べてはなりませんでした。もちろん、そうでしょう。なぜ